令和８年度第２回「教育に関する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価」有識者会議
会議録

日　時　　令和８年６月22日（月）　　午後１時40分～午後４時00分
場　所　　九段中等教育学校九段校舎会議室

議事日程

第　１　教育長挨拶
第　２　議題
　主要施策の成果から選定した事業「ＩＣＴ学校教育システムの推進」
　（１）ちよだリテラシー教育
　（２）九段中等教育学校におけるＩＣＴ教育（視察を含む）
第　３　その他

出席者

点検及び評価に関する有識者（４名）

武蔵野大学副学長	上岡　学
元多摩市教育長	清水　哲也
日本女子大学家政学部児童学科特任教授	粂原　淳子
東京学芸大学教育学部教授	高橋　純

事務局（17名）

教育長	堀米　孝尚
子ども部長	小川　賢太郎
教育担当部長	中田　治子
子ども部参事（連絡調整担当） （事務取扱　子ども総務課長）	加藤　伸昭
子ども支援課長	大松　雄一郎
子育て推進課長	神河　洋行
児童・家庭支援センター所長	千野　俊
児童・家庭支援センター 子どもの居場所づくり担当課長	緒方　直美
子ども施設課長	高島　健太
学務課長	須貝　誠一
指導課長	上原　史士
指導課統括指導主事	相場　奨太
九段中等教育学校校長	富川　麗子
九段中等教育学校主幹教諭	市川　淳慰

副参事（特命担当） （九段中等教育学校経営企画室長兼務）	大塚　立志
子ども総務課子ども法制担当係長	品治　正
子ども総務課子ども総務係	板垣　夏実

子ども総務課長　それでは、これから有識者会議を始めさせていただきたいと思います。

早速ではございますが、視察も無事終えたところで、次第をご覧いただければと思います。次第の１番、教育長にご挨拶いただいた後に九段中等教育学校校長からもご挨拶いただければと思います。

初めに、堀米教育長からご挨拶いただければと思います。よろしくお願いいたします。

教　育　長　はい。委員の先生方、大変お忙しい中、今日はありがとうございます。

東京都でも唯一、全国でもそうですが、区立の中等教育学校ということで九段中等教育学校が発足しているわけでございます。いろいろな、ICTも含めて、千代田区ではもちろん、それから東京都でもトップを行く、また全国でもトップを行くような、ICTも使いながら、それだけではなくて、今日、資料にもありますし、また九段中等教育学校校長からも紹介があると思いますが、全国をリードするような教育をしていこうということで、今、職員も含めて頑張っているところでございます。生徒の構成は、半分が都内から、半分が千代田区内から通学しているところでございます。

最初に、入学のときは、千代田区の枠よりも他区から来た子たちのほうが、学力が高い傾向にあります。それは、有名私立学校に行く子たち以外は九段中等教育学校を受けますので、その小学校のトップが集まる。それだけ優秀な子たちが通学しているということが、前提になってくるわけです。この数年間、イギリス大使館と連携して、リテラシーの授業をしてもらっているのですが、オール英語でできるとか、中学生がやっているとか、なかなかそういう意味では、学校としてもレベルの高いことをしてもらっているところでございます。

課題は、東京都と同じで、人事異動も東京都にお願いしている。前期課程はいわゆる指導課管理係がやっていますけれども、後期課程は都立高校の人事で回していただいていることが１つです。その中で入試の作問が本当に大変なのです。九段中等教育学校は、日比谷高等学校もそうですが、独自の問題を作っていて、全都から半分の子たちが来ているので、簡潔に言うと、その問題作成を分けてほしいというような話を今進めている最中なのです。全部、千代田区だったらそうはいかないので、半分ずつですので、都の作問にもこちらも協力するし、やれることは千代田区もやりますと。

今年度は無理ですけれど、来年度の入試ぐらいには何とかできないかという方向で、今、課題としてはその辺が区立の中等教育学校としての課題があります。

それからもう一つは、九段高校からの流れがあるということです。九段高

校の歴史、OBの方々も、なかなか非常に、九段中等教育学校について愛着を持っている反面、いろいろなご意見をいただいています。至大荘という夏の宿泊行事が九段高校は有名だったのです。そういったところも少しずつ現代に合わせていろいろ変えていくよう今後も教育委員会と一緒になって、よりよい区立の中等教育学校をこれからもつくっていきたいということで今日は伺っております。

今日の授業も、なかなか、全部見るわけではないので、このポイントというところになかなか見られなかったものもありますけれども、それぞれのところでご覧いただいたとおり、かなり、日常のツールとしてICTを使っているということが分かりました。また、それぞれ、ご感想、忌憚ない講評を頂きながら、今日はひとつよろしくお願いしたいと思います。

以上でございます。

子ども総務課長　はい。堀米教育長、ありがとうございました。

続きまして、富川校長先生、お願いします。

九段中等教育学校校長　はい。本日は、お忙しい中、本校の点検・評価会議にお集まりいただきましてありがとうございます。改めまして、九段中等教育学校校長の富川と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本校は大正13年に第一東京市立中学校として開校し、その後、東京都立九段高等学校を経て、平成18年度に千代田区立九段中等教育学校として開校いたしました。今年度、20周年記念式典を迎える年となっております。

本校では「豊かな心　知の創造　未来貢献」を教育目標に掲げて、６年間一貫の強みを最大限に生かして、そして探究活動や実践的な英語教育に力を入れております。探究の中では、グローバル教育、STEAM教育、アントレプレナーシップ教育を軸として進めておりまして、生徒の知的好奇心を喚起して、社会に貢献できる、そういった志を育成しております。また、海外指定大学との連携による国際理解教育や、あと文部科学省の生成AIパイロット校の指定を受けて、先端的な教育DXをしているところです。今後も急速的に変化するデジタル社会において、本校は教育DXの推進を学校経営の重要な柱の位置づけとしているところです。

具体的には、２つの施策を展開しております。

第一に、文部科学省の生成AIパイロット校として、先端的なICT活用教育の研究、実践を進化させて、その成果を全国に発信しています。また、生成AIを安全かつ効率よく活用できる環境を整備するとともに、情報の中に教育を並行して推進しております。

そして、第二といたしまして、DXハイスクール指定校として、学生向きのPCやデジタルコミュニケーション機器などの最先端機器を整備して、そして教科横断的な学習を展開しております。これらを通じて、教育DXにおいても教育のトップランナーとしての役割を果たしていこうと取り組んでいるところです。

生成AIの登場によって社会が急速に変化する中で、生徒たちにどのような

力がついていくかが必要なのかということを常に問い直しながら、事務改善に取り組んでいくものです。

今日の資料３－３に、本校のアプリotomottoの図があるのですけれども、本校では生成AIシステム「otomotto」を活用しております。これはみんなの学びのお供になるようにという願いが込められていまして、身近な対話の相手として感じられるように、本校の制服をイメージした親しみやすい名称とアイコンが生徒によって作成されました。正しく、安全に、そして自分の考えを深める学びの道具として活用することで、AI時代を生き抜く力を育てたいと考えております。

本日の点検・評価が本校の教育をさらに充実させるための貴重な機会となりますよう、本日はどうぞよろしくお願いいたします。

子ども総務課長　富川校長先生、ありがとうございました。

それでは、次第に沿って進める前に、配付資料の確認をさせていただきます。

まず、次第がございます。その次、資料１が名簿でございます。資料２－１から資料２－４までがちよだリテラシー教育の資料でございます。

その次に、九段中等教育学校のICT教育の資料が、３－１から３－５までございます。

最後に、委員の皆様のお手元には、有識者意見ということで、一枚、紙をつけさせていただいております。

資料は、皆さん、ございますでしょうか。

（はい）

子ども総務課長　はい。それでは、進めさせていただきます。

それでは、早速議題に入ってまいります。１つ目はちよだリテラシー教育について、指導課長から説明をお願いいたします。

指導課長　それでは、令和７年度「ちよだリテラシー教育」の取組について、資料２－１から説明させていただきます。

まず、本取組の背景についてご説明申し上げます。資料２－１の項番１のところをご覧ください。

近年、ご存知のようにSNSやインターネットの普及で、子どもたちにも生徒にとっても、誰もが簡単に情報を発信し、また多様な情報を瞬時に取得できる社会となっているところでございます。こうした環境はとても便利である一方で、真偽が不確かな情報だとか偏った情報に容易に触れることができる側面もございます。そのため、情報をそのまま受け取るのではなくて、自分の考えを持ちながら、情報の内容や信頼性を適切に判断する力を育成することがこれまで以上に重要となってくるところです。そのような、いわゆる社会的背景を踏まえまして、区としてもちよだリテラシー教育を推進し、特にメディアリテラシーの育成に重点的に取り組んでいるところでございます。

これまでの教育委員会及び学校の取組についてご説明申し上げます。教育委員会での取組としましては、まず目指す子供の姿だとか育成する力を明確

に整理しまして、それらを各学校の教育課程にしっかり位置づけることで取組の方向性を可視化してまいりました。これによって、学校ごとの取組のばらつきも押さえつつ、全体的に共通の視点でリテラシー教育を推進する体制を整えてまいりました。

また、メディアリテラシーに関する教材資料の整理だとか、あと管理職向け研修の実施を通しまして、学校全体としての指導力向上にも取り組んでまいりました。併せて、児童・生徒を対象とした実態調査の実施によって、現状の課題を把握するとともに、その結果を踏まえた授業公開とか講演会、そのものを通しまして、指導改善につなげているところです。

さらに、各学校においても、外部人材を活用した授業の実施だとか読書活動の充実だとか、実態に応じた工夫ある取組が進められているところでございます。

実態調査について説明いたします。成果として見られる点ですけれど、資料２－３をご覧いただければと思います。

いくつかありますが、質問項目の１の、インターネット上で相手への配慮を考えて発信することについて。こちらですが、小中学校とも約９割前後の児童・生徒が「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」と回答していて、高い水準にあります。

また、質問項目の２に当たります。自分の行動が周囲や社会に与える影響を考えることができるか、その問いについても、小学校では95％から98％程度、中学校でも92％から93％が「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」と回答しておりまして、情報モラルや基本的な判断力についてはこれまでの取組の成果が着実に上がっていると捉えています。

一方で、今後の課題も明らかになっています。質問項目11の確かな情報を見極める、こちらについては、小学校６年生では63％の児童が当てはまると回答しているのですが、中学校３年生では46％まで低下していて、学年が上がるにつれて伸び悩む傾向が見られます。

また、少し戻っていただきまして、質問項目５と６、事実と意見を区別する力についても、小学校では「当てはまる」が50％台にとどまって、中学校では40％台まで低下しています。

それと、その次の質問の７、８です。こちらは情報を自発的に読み解く力。こちらについては全体として「当てはまる」が50％以下。中学校では30％ぐらいにとどまっているものの、十分身についているとは言い難い状況だと思いました。

加えて、また最後のページで、13、14の質問項目。こちらは、自分の考えを訂正する力が、こちらについては小学校で「当てはまる」が50％台、中学校では40％を下回る。情報を整理し、考えを構築して発信する力の育成も課題となっているところです。

このように、基本的なモラルや配慮というところは身についている一方で、情報を多角的に捉えて比較し、批判的に判断し、自分の考えとしてまと

めるといった、より高度なリテラシーの能力の育成が求められている状況でございます。

最後にですけれども、令和８年度の取組について触れさせていただきます。資料２－２です。

先ほど申し上げましたとおり、基本的な情報モラルが身についている一方で、情報の発信、信頼性を見極める力や、意見を区別する力、あと批判的に読み解く力、そして自分の考えを論理的に提言する力に課題が見られました。こういった課題を踏まえまして、区独自のリテラシー検定を導入していきます。これによって、児童・生徒の一人一人のリテラシーの到達状況を可視化しまして、確かな情報を見極める力の育成状況を把握し、結果を個別の指導改善にもつなげてまいります。

続いて、情報を批判的に読み解く力の育成に向けては、インターネット上の情報については、発信元や信頼性を確認する学習を行ってまいります。

次に、生成AIの適切な活用を取り入れまして、生成した情報をそのまま受け取るのではなくて、他の資料やノートと照らし合わせながら検証するという学習を行うことで、自ら情報を分析し、主体的に判断する力というのも高めてまいります。

さらに、日常的に情報を受理する習慣の形成に向けて、「よむYOMUワークシート」、今回は「読解力向上ワークシート」と書いてあるのですけれど、活用した読解力向上の取組だとか読売KODOMO新聞、中高生新聞の活用、こちらも推進していきます。これによって、文章を正確に読み取り、異なる立場の情報を比較しながら考える機会を継続的に確保してまいります。

こういった取組を教科横断的かつ発達段階に応じて体系的に進めることで、児童・生徒が情報を多角的に捉え、判断し、自らの考えを形成、発展できる力を着実に育成してまいります。

ちよだリテラシー教育の取組についてのご説明は以上です。

子ども総務課長　はい。説明、ありがとうございました。

それでは、委員の皆様からの質疑応答に入らせていただきたいと思います。ご疑問点やご提案等ございましたらお願いいたします。

では、上岡委員、お願いいたします。

上岡委員　ご説明をありがとうございました。どれもその通りだと思って伺っておりました。特に真偽の判断であるとか、信頼性とか、それから、SNSであると表現によるトラブル、コミュニケーショントラブルとかがあります。そして、それにのっとって進めていくというのはよく分かるのですけれども、一番大事なところである内容をしっかりと教えるとか、どこの時間でどれぐらいやるというようなことは、どのようにやられているでしょうか。今の資料２－２を見ますと、検定、生成AIの活用、読解力のワークシート、子ども新聞とあるのですけれども、一番大事なところである、例えば、このネットの情報と、このネットの情報はどう違うかとか、どこを見ればいいかとか、一番核心のところ、本当にありそうなものをどう指導しているのか、あるいは指導

されていないのか、あるいはどこでやっているのかということを伺いたいのです。

指導課長　そもそも、今現在、これの取組に当たって、今やっている学校の取組を整理させていただきました。各教科等で行っている取組だとか特色活動だとか、そういったものを含めて、資料のデータの見方、活用とか、そういったものを１つ、整理させていただきまして、こちらのりんごに示した７つの力があるのですけれども、これらの育成に向けて、今一度、教科活動における取組を確認させていただきました。

そうすると、今お話しいただいたような内容は、実は各教科等で、もうすごく関わってくる部分が、教員がそこで意識するかどうかというのが非常に大きくて、従前はその教科の狙いに即した授業が特に大事なのですけれど、そこにさらにこういった力の育成を意識した教科指導を行っていく中で、今お話しいただいた以外に、例えば、国語科の授業でも、社会科の授業でも意識的に行うことでそういう場面を取り入れることができるので、そういう場合には教員が意識している。それをやることによって、どういう力を身につけられるかというところをさらに可視化したというか整理させていただいたところです。

なので、何か特化してやるという授業も、当然、１時間、２時間行っているところはあります。そればかりやっていると、本来の教科指導ができないので、教科書の中へどう落とし込むかというところで、現在扱っているところもございます。

上岡委員　はい。よく分かるのですけれども、直接的には例えば総合学習で、本当に直接的な教材でやるということを実施しないということはないのか。インターネットで出会えるので、扱わないことはないのか。基本的なリテラシーとしてベーシックなところで持っているのはすごく大事ですけれど、直接的な教育というのも必要だと思いました。

指導課長　その辺り、指導計画で、今年度の取組でも、昨年度に初めて取り組んだところもある。今年度、同様の教育課程にしっかり位置づけて、指導計画の中でそういった時間を設けるように、しっかり、その辺りから見直す、そういう時間というのが確実に取れると言えますし、教科等の中でも当然そういう時間も入れることができます。特化した授業は、当然あってもいいかと思うのですけれども、バランスよくやっていきたいと思います。

上岡委員　はい、分かりました。ありがとうございます。

教育長　去年の、読売だったり、お茶の水小学校に試験的に、先行的に。

指導課長　お茶の水小学校と番町小学校にやりました。

教育長　この絵は、見ておかしくないかとかというような、ライオンが逃げたとか、そんな誤情報。理解というか、見える化というか具体的なものをやってはいるのですけれども、やはり全体の教育の中でやっていったほうがいいだろう。

指導課長　社会科の情報を扱う授業で、例えば導入でそれを少し取り入れたというと

ころがありました。教材を使って、導入でそういう場面をつくって、実際に考えさせて、情報をどう取り扱うかというところを社会科だとかでやったのです。それは入り口に使っているということです。

上岡委員　はい。ありがとうございます。

子ども総務課長　はい。ありがとうございます。

では、清水委員、お願いします。

清水委員　同じところになるのですけど、例えば外部の専門家を招いてやるような授業を各学校ではやっていないということですか。

指導課長　現状、千代田にあるちよだスマートスクールの日というのが全校に、必ず１日設けさせていただいています。そこで外部の方を入れて、そういった講演会をやっていただいたりとか、そういう時間は設けています。学校によっては、今、このリテラシー教育に関して特色ある教育活動として費用を、こちら各学校に配付し、その外部の講師だとかに概要をそういうふうにやっていただくとか、そういう時間を意図的につくるのも、実は同じなのです。

清水委員　今回、AIが、既に入っているのですよね。AIについても、やはりリテラシー教育が大切になる。そういうものは必要ではないかと思いました。外部の講師を招聘することはないのですか。

指導課長　AIについても、取り入れていまして、九段中等教育学校が取り組んでいることを参考にして、今、中学校や小学５年生で取り組んでいるところなのですけれども、それも当然、内部の課題を話していただいて、九段中等教育学校の方でも情報に特化した先生がいらっしゃいますので、学校教育研修を行っていただいたりとか、そういったところで提案がしっかりした活用の仕方とか子どもたちにさらに落とし込めるように、その取り組みも実施しています。

清水委員　はい、分かりました。

子ども総務課長　はい。ありがとうございます。

では、粂原委員、お願いします。

粂原委員　ちよだリテラシー教育の推進は生成AIが定着していく、発展していく社会の中で非常に重要であると思います。大学で授業していて、レポートなどを提出してもらっても、本人が本当に書いたかどうかというのも見抜けないような状況があります。AIを利用して学習する際の課題としては、それが本当に自分自身の考えなのかどうなのかを問い直していくというところだと思っています。

先ほど授業を見学する中でも九段中等教育学校の生徒さんたちは学力が高いですし、話し合いもうまく進めていく状況などが見られましたが、やはりいろいろな子どもがいることを考えたときに、このリテラシー教育を推進していくとともに今、上岡先生がおっしゃったように直接体験と絡めながら学んでいくという、実感を持った教育の在り方が非常に重要なのかと思いました。例えば、課題に応じてインタビューに行くとか、地域に出ていって調べるとか、そうした直接的な体験を絡めながら実感を伴った学びをしてほしい

と思います。
いくつかのアンケート項目で小学校よりも中学校の数値のほうが下がっているということも、今、説明の中でありましたが、やはり成長に伴ってそれだけその難しさとか困難さを自覚していっていることなのではないかと思います。だからこそ、真剣に考えていくことが必要という課題意識になっていくのではないかと思います。ありがとうございました。

指導課長　ありがとうございます。この資料２－２の左上のところにあるりんごの木で表した、その少し下に（１）、（２）、（３）、（４）、（５）とありまして、リテラシー教育を進めていく中でとても柱になっていくものが（１）から（５）であると思っていまして、言葉を中心にしたやはり言語能力をしっかり身につけていくのが非常に大事だということで、書くこと、読むこと、ここは絶対なくしてはいけない。ICTをうまく使って、生成AIもうまく使っていき、例えば、自分の考えを形成したり、客観的に読み解く力という能力を絶対外さないように、これを第一の柱とさせていただいているところです。

実際に、神保町の古書店街の本を見るとか、古書店の人とかに話を聞くとか、そんな活動も実はリテラシー教育の中に入れているところですので、AIなどの技術の活用、こういったところも併せてやっていくというところです。

粂原委員　背景のところに「人と人との触れ合いの中で自分を見つめ直すことが重要である」と書かれているのが本当に大事なことだと思っていて、やはり心で感じて、相手を感じながら発信するという力が、よりこれから求められると思っています。

また、スウェーデンやフィンランドでは、場面に応じて紙ベースで学ぶことも重視するようになった自治体もあるそうですけれども、そういう他国の取組も注視しながら、実装につなげていっていただけるとよいかと思いました。

指導課長　ありがとうございます。

子ども総務課長　はい。ありがとうございます。

では、高橋委員、お願いします。

高橋委員　ありがとうございました。この資料２－２の全体に関しては、資料２－３も含めて、こういうことに取り組んでいる自治体というのは非常に少ないし、現代的な課題ですし、成果も上がっているようなので、これはすごく重要なことだと思っています。

ちよだリテラシー教育は特にメディアリテラシーに重点を置いていますが、資料２－３の質問項目を見ると、「類似情報を比較する」「事実と意見を区別する」「批判的に読み解く」「真偽を見極める」といった力は、メディアリテラシーとして、それのみを教えれば正答率が上がる、という性質のものではありません。もしその程度で身につくのなら、振り込め詐欺はとうになくなっているはずです。これらは総合的な経験と知識に支えられる力で

あり、リテラシー教育として考えて、「情報を読み解く」の「情報」とは、ICTに限らず世の中のあらゆる事象を指し、それを読み取って自己の信念に基づいて判断することだと考えます。

カリキュラム全体に何が足りないか。思考力・判断力・表現力といった高次の資質を育てるには、問題解決活動や探究活動を繰り返す必要があります。ところが、それを支える「探究基礎」「問題解決基礎」にあたる指導が、各教科にばらばらに置かれているのが実態です。学習指導要領も、既存の教科を損なわないよう配慮した結果、縦割りになっています。ICTを用いて情報を扱う部分は「情報活用」に、ICTを用いない情報の扱いは、明言されていませんが国語に、それらをつないで発揮する場面は総合的な学習に、と割り振られ、担当者ごとに摩擦なく収まる形になっているわけです。

しかし本来は、メディアリテラシーや「探究基礎・問題解決基礎」を含むリテラシーとして全体を見渡して教えてこそ、問題解決能力の高い子どもが育つのだと思います。その鍵は「見方・考え方」です。しかも教科の見方・考え方というより、世の中の見方・考え方をリテラシーとして教えることが重要です。それが身についていれば、たとえば初めて聴く曲でも「これはあの作曲家ではないか」と見当がつく。同じように情報の真偽についても、「いつもとパターンが違う」「初めてのパターンだが本質は同じだから信頼できる」といった判断ができるようになります。

今日の視察でも、国語の先生が語っていたのはまさにその場の見方・考え方でした。あれをもっと多様な場面に適用できるよう教えていけるとよい。一方、理科は見方・考え方として教えず、粒子性や原子などを個別の知識として扱っており、感覚が育ちにくい指導になっています。入試学力をゴールとするならこれ以上うまく教えている学校はほとんどないと思いますが、学習指導要領はその先の概念的理解までを目指すと書いている。そこまで見据えると、「メディア」を外した、高い資質・能力を育てるためのリテラシー教育こそが重要になります。それらをつないでコアな部分に迫るカリキュラムができれば、多くの先生の賛同も得やすいのではないでしょうか。

指導課長　ありがとうございます。実は、そこは、今お話しいただいたようなところに今後狙っていっているところでして、今回、メディアリテラシーというところを入り口にさせていただいて、令和７年度から始まりました。今回、こういう新たな取組等も踏まえながら、各学校の取組を見ながら、また、新しい学習指導要領との動きを見ながらとか、そういったとろを踏まえて、リテラシーとは何ぞやというのを改めてもう一回考えながら、どんなことを工夫しながら、今お話しいただいたような視点等も踏まえて、どんどん変化させていきたいと思っています。

高橋委員　今の学習指導要領は、事務手続やテクニックに寄っている面があります。実際に子どもを預かる立場としては、諸領域をつなげて指導しつつ、対外的には「学習指導要領の方法に沿っている」と説明できるようにしておく必要がある。あの縦割り感のままでは危ういと思います。「メディアリテラシ

ー」「○○教育」と○○教育が増えるほど現場の先生は疲弊しますので、まず「根本は何か」を伝え、その下位に各○○教育が位置づく、という構造を示していくことが大切だと思います。

子ども総務課長　ありがとうございます。

ほかにございますでしょうか。よろしいでしょうか。

教　育　長　よろしいですか。

子ども総務課長　はい。教育長、お願いします。

教　育　長　ありがとうございます。今、確かに○○教育、○○教育というと、こういうものが出てくるという、どうしてもなってしまうのですけれど、やはり新しい学習指導要領に探究というのがあると思うので、今、探究についても各校、成長段階でどのようなことが探究に結びついていくか、千代田区だと幼稚園からずっとありますので、そういった縦の筋を見ながらも、これからキーワードとしても探究についても結構それぞれ我々はきちんと探究していかなければ駄目だというようなところで、今、ちょうどそろそろ千代田区の探究を考えていくというようなことで、専門家も呼びながら、体系づけをしていこうと。その中に、今度いろいろなものが出てくる。縦が、横串がきちんと入ってくる形にもなるのかなと思っています。

それから、そのためには、やはり個別具体的なものもそうですけれども、長期的な学びをやはり充実していかないと駄目だろうということで、共同的な学びをいかに高めていくための集団にしていくかが、今、千代田区としての課題がありますので、それも含めて考えていきたいと思います。今後とも先生方にいろいろとご指導いただければと思います。よろしくお願いします。

子ども総務課長　はい。ありがとうございます。

それでは、次の議題に移らせていただいてもよろしいでしょうか。

では、続きまして、次第の（２）九段中等教育学校におけるICT教育に移らせていただきます。

それでは、九段中等教育学校経営企画室長、説明をお願いいたします。

九段中等教育学校経営企画室長　はい。それでは、資料３－１をご覧ください。「九段中等教育学校、校内ICT教育環境整備のあゆみ」ということでタイトルを掲げております。

本校では、生徒が学習活動において、情報や情報手段を主体的に活用する能力を育成することができるよう、タブレット型パソコンを１人１台活用し、生徒と相互に話し合うための情報の共有や学習成果をまとめて発表するなどの活動が効率よくできることを目指し、環境整備を進めてまいりました。

この表にご覧のとおり、令和２年度はGIGAスクール構想に基づき生徒の端末整備、そして、令和３年度には、PC教室、LL教室での更新を行っております。

令和４年度は、学校管理システム用サーバメーカーのサポート終了に伴い、サーバを更新しています。

そして、令和５年度は、文部科学省実施のリーディングDX推進企業の生成AIパイロット校に採択となり、１人１台端末とクラウド環境を活用した効果的な教育実践創出のモデル化実践校として独自生成AI開発のため、その導入プロセス及びプロトタイプの開発・検証・活用を行いました。

そして、令和６年度は、クラウド環境を利用した統合型校務支援システム導入及びICT教育用タブレットPCの更新をしました。また、独自生成AI「otomotto」を開発し、令和６年10月より本格稼働を開始したところでございます。令和５年度に引き続き、生成AIパイロット校に応募、採択となり、生成AIを活用した、効果的な実践創出のモデル校として、内外へ生成AI活用事例の普及活動を実施いたしました。加えて、新たに文部科学省実施の高等学校DX加速化推進事業に応募、採択となり、デジタル等成長分野を支える人材育成の先進的実践校として、分離横断的な探究活動のための実習環境を整備いたしました。

さらに令和７年度は、サーバ、ネットワーク機器等を更新し、より安全で安定的かつ高速な通信環境を実現いたしました。また、PC教室及びLL教室の機器を更新することにより、最先端の学びの環境として、PC教室全体を発展的に再構築するとともに、実習用機器を最大限活用できるよう、環境整備を行いました。

令和８年度は、前年度に引き続き、生成AIパイロット校及び高等学校DX加速化推進事業指定校として、探究的学びの実践、横断的な学習環境の充実をさらに進めてまいります。

次に、資料３－２をご覧ください。こちらは、こうした教育環境整備を踏まえて、現在の本校のICT教育システムの全体像を図表化したものでございます。

一番上に、大きく、目的として３点、学習環境の改善、校務効率化（働き方改革）、安全性の担保。下に４つの構成図、その下に基盤DXを記載させていただいております。

資料３－３をご覧ください。こちらは、本校の教育ICT環境、こちらについて、学校案内から抜粋したものでございますが、こういったビジュアルを交えて見える化したものであります。端末・ソフトウェア、クラウド環境、生成AI。そして、文部科学省の指定事業として、生成AIパイロット校、高等学校DX加速化推進事業について紹介しているところでございます。

最後に、資料３－４と３－５でございます。こちらは生成AIパイロット校として文部科学省から指定されておりますが、令和７年度に文部科学省に提出いたしました報告内容で、校務利用が資料３－４、教育利用が資料３－５でございます。こちらはかなり細かくて恐縮です。ボリュームがありましたので、後ほどお読みいただけたらと思います。

冒頭の校長ご挨拶で申しましたように、本校は学校経営、教育の重点事項として、ICT教育の推進を掲げて取り組んでいるところでございます。

説明は以上でございます。よろしくお願いいたします。

子ども総務課長　はい。ありがとうございました。

それでは、先ほど同様に、質疑応答に入らせていただきたいと思います。もしよろしければ、授業の所感も踏まえてお話しいただければありがたいと思います。それでは、お願いいたします。

では、上岡委員、お願いいたします。

上岡委員　まず１つは、この独自生成AIの開発は、どういうことか、どこからどう作ったか、どなたがやったか教えていただければと思います。

九段中等教育学校主幹教諭　はい。もともと、企業向けのAIチャットボットなどを開発されている事業者がございまして、令和５年度に取組を始めようとなったときに、どういった形で始めるのがいいか、今ほど多くの人が生成AIを活用している状況でもありませんでしたので、教育現場で使えるものはどのようなものなのだろうか、本校は中学１年生から生徒がおりますので、中学１年生が年齢制限がなく使えるかどうかであったり、学校の情報が外部に流出しないかどうか、そういったいろいろな不安な点もありましたので、これは一般のサービスではなく、教育用に改めて開発していただくのがいいだろうということで決定しまして、そのような事業者を紹介していただきましてご相談したところ、企業向けにつくっているものを少し改修するような形で学校向けにもつくれるのではないかと。ただ、教育関係をやったことがある事業者ではありませんでしたので、学校の授業でどういった機能があったら安心して使えますかということで、我々教員から、こういった部分はこうしてほしいということを、たくさん要望をお伝えいたしまして、１年ほどかけて開発にこぎ着けた形でございます。

上岡委員　今、そのコアの部分は、例えばChat GPTとかGeminiとかと同じようなものなのですか。

九段中等教育学校主幹教諭　はい。言語モデル自体は、Chat GPT、それからClaude、どちらも、両方とも連携して使わせていただいております。

上岡委員　そうすると、結構使うようになったら、使えば使うほど、間違った情報も入ったりするのですけれども、間違った情報が出ていることもあるのですか。

九段中等教育学校主幹教諭　はい。間違った情報も出てくることはございます。本校の場合は、入学して３日後には、AIに関するガイダンスを生徒に行っておりまして、その中で、実際に間違った回答が来る場面を体験して学んでもらっています。

上岡委員　はい。ありがとうございます。

授業の感想は、AIを使いこなしていると思っていて、そうなると、だんだん、先生が要らなくなる、聞きたいことは全部AIに聞けば、むしろ正確に深く教えてくれるのですよね。ですので、一番原則であるとか基本であるとかというのを皆で一律に学ぶことはあるのかどうか。例えばですけれども、視察した美術で今日、構成美をやったと思うのですけれども、あれも多分デザインの構成の原則とか基本というものはあると思うのです。そういうのを、例えば美術大学などではきちんとまず教えて、そこから広げるふうになると

思うのですけれども、それが全くなくて、それぞれ皆調べなさい、美しいと思うものを書きなさいというと、これまでのデザインという分野での基本とか何かが押さえられるのかと思いました。その辺りはきちんと授業でやられているのかというところを伺いたいと思いました。そこはいかがですか。

おそらく、教科全てにいえると思いますが、個別の学習というのは、個別最適化ということはあるのですけれども、何か一番もとのところの原理原則の部分は皆同時に勉強したほうが理解できるのではないかと思っていますが、そこはどうなのでしょうか。

九段中等教育学校校長　そうですね。今日見ていただいた美術の授業で、何か食べ物をモチーフにしてデザインにしていくというものだったと思うのですけれども、少し前に同じ教員の授業を見たときには、何かテーマを決めて、そのテーマに基づいた調べ学習をやるときにも、その授業の前段のところでデザインとはとか、よく定義みたいなのを、美術の知識として必要な要素については、まずはこういった端末を使わないで、教科書とかに基づいて授業を行って、その上で授業を進めているという取組になっています。

同じように、ほかの教科などでも、まずは分からないところはAIに聞くのではなく、教科書や資料集などを調べてから、まずは考えるという、授業活用をしております。

上岡委員　はい。食物ということで言うと、タブレットの写真では感じ取れない立体感とか陰影とかは実物でないと感じ取れない部分があると思うのです。それはそれで、またきちんとやっているということですね。どうもありがとうございました。

子ども総務課長　はい。ありがとうございます。

では、粂原委員、お願いいたします。

粂原委員　授業を見せていただき、ありがとうございました。もっと見ていたいという気持ちで参観させていただいていました。同時に、自分たちが受けてきた教育とは大きく変わってきているのだということを実感し、そのよさも感じることができました。授業の中で何か自由感みたいなものを感じるというか、先生とのやり取りもとても自然で、授業規律に縛られすぎず、自分の思いを出せている雰囲気を感じて、うれしく思いながら見させていただきました。

資料３－５の（４）に、「生成AIの活用について、難しいと感じている点があれば教えてください」というところの回答で、「情報の真偽・信頼性の判断が難しい」という実感を生徒さんたちが持っていることと、「依存・思考力低下・距離感への不安」を感じていることが非常に大事なことだと思っています。学び続けていく中で、その下の（５）の④に「まずは自分で考えて使う」、「全部をAIに任せない鵜呑みにせず、ファクトチェックを行う」とか、「AIの案をそのまま使わず、自分の言葉に直していく」とか、AIの使い方について自分に問いかけているところに、リテラシー教育の成果を感じました。問いを持つというのは、AIより人間のほうが主体的で優秀な部分で

はないかとも思ったりするので、やはり生徒さんたち自身がそういうことを実感しているということに安心感、期待を覚えました。ありがとうございました。

子ども総務課長　ありがとうございました。

では、清水委員、お願いいたします。

清 水 委 員　先ほどの情報リテラシー教育についても丁寧に行われているのだと感じました。特に、区立の中等教育学校として、日本でも先端のICT教育の環境が整えられている。ただ、それだけではなくて、最大限それを校長先生も先生方も一緒になってAIを活用していこうとされている。それが一番すばらしいことだと思いました。

文部科学省を含めて、いろいろなところと連携しながら進められている。民間企業との連携、そういった外部の力をどのように活用するか、これからの働き方改革を進めていく上でも非常に大切な部分ではないかと思いました。

理科の授業をもっと見たかったと思います。課題があったらAIに聞くのではなくて自分の考えをAIに入れるという作業があり、そういうAIの使い方があるのだと改めて勉強になりました。今日は何か新しい教育の流れみたいな、風みたいなものを感じました。

子ども総務課長　ありがとうございました。

では、高橋委員、お願いいたします。

高 橋 委 員　ありがとうございました。ICTの環境整備も含め、この水準まで整えられている学校はそう多くありません。高等学校も整ってきているとはいえ地域差もありますが、都立はよくやっており、他県と比べても、国語の指導案などを拝見すると先生方が非常に熱心で、たいへん参考になりました。

ただ、例えるなら「レコードをCDにする」のか「CDをスマホにする」のか、という違いがあります。今日の授業は、いわば古いレコードの授業をCDにしたものだと思います。それでも音質は良くなり、持ち運びやすくもなって、多くの改善が実現している。しかし九段中等教育学校の先生方は子ども以上に優秀ですから、もっと本質を追いかけて「スマホ」のようにつくり変えるチャンスもあるはずです。

PDCAで今ある問題を改善していっても、CDはCDのままで、スマホにはなりません。本質的に「どんな力をつけるべきか」をもっと真剣に議論する必要があります。それを実現する技術は、九段中等教育学校の先生方と環境には備わっていると思います。「今ある問題をなくす議論」をするのか、「あるべき姿を目指す」のか。その違いだけで、結果は劇的に変わると思います。ある中学校は十年かけて、まったく違う授業を実現した例もあります。

例えば、入試の問題です。いまや東大の問題ですらAIが首席で合格してしまう。つまり、電卓を叩けば答えが出るようなことを一生懸命学んでいる可能性がある。だとすれば、電卓では答えの出ないこと、一段も二段も上の、私が「概念的理解」と呼ぶ領域を学ばせる必要があります。

中高生もAIをうまく使いこなしていますが、今日の理科でも、結局はテスト学力的なことをAIに尋ねていて、概念形成のためのAI活用にはなっていない。そこが少しもったいない。ドリル的な部分はAIに任せ、例えば「粒子性とは何か」を考えさせる。国語なら、登場人物・背景・物語を読むことを毎回指示しなくても、子どもが自然に人物相関や情景を頭の中に描けるようにする。小学校から繰り返しやってきているのですから。今日の美術がまさにそうで、「コアな部分＝見方・考え方」を先生が伝えているから、穴あきワークシートがなくても子どもたちが自分で動けていた。逆に国語や理科は、穴あきワークシートを作らないと学習が進まない。大事な部分が繰り返し伝わっていれば、子どもは自ずと活動できるのです。そこを攻めると、とても面白いと思います。

以前、北欧の授業を見に行くと、子どもたちが机上にスマホを置いて、先生の話を聞かずに触り続け、それを止めない状況がありました。ああいう状況でデジタルを入れても駄目でしょう。授業の在り方そのものが違うのです。だから紙かデジタルかを超えて、「その子に何をさせたいのか」を突き詰めて深めていくと、非常に面白い。スマホも、最初からその形を目指したわけではなく、試行錯誤の末にああなった。九段中等教育学校も、初めて見る人には違和感ばかりの授業に映るかもしれませんが、子どもが先生や学校と自然に学びを交わしている。そんな姿になっていくことを期待しています。

子ども総務課長　ありがとうございました。

教　育　長　今日はありがとうございました。

少し私からお尋ねしたいのですけれども、小学校高学年からの授業で生成AIを活用しようと思っておりますけれども、実際、大学生をご覧になっていて、これから生成AIの活用というのは、義務教育は、やはり中学校あたりから、どのようなことに気をつけたらいいのではないか、どのような考えの下、使わせていったらいいのかというものがありましたら教えていただきたいです。

あとは、まだ生成AIなどなかったときは、課題などは自分の時間に手で書かせるということだったのですけれども、その辺は大分もう時間的ですので、この数年で全然違うと思います。生成AIの我々の気をつけて指導していかなければいけないことも含めて、教えていただければ、ご指導いただけるとありがたいです。

子ども総務課長　では、上岡委員、よろしくお願いいたします。

上　岡　委　員　はい。まずとある研究で、生成AIに全部レポートを書かせているグループと、自分で書かせているグループとでは、頭に残る定着が大きく異なるという結果が出ています。生成AIにやらせるとほとんど頭に残らない、自分で作成すると残りやすいという結果です。それを踏まえて私は指導において、レポートを書かせるときに生成AIを使っていいが、きちんと自分の身になるように、要するに、今の研究にあるように、頭に何にも残っていないというレ

ポートでは全く意味がない。だから、生成AIを使ってレポートを書いてもいいけれども、それが自分のものになっているかどうか。それは言い換えれば、レポートを出した後にきちんとそれについて話せるようになっているかどうか、というようなことを検証しながら作りなさいと言っています。

実際、生成AIでレポートも書いてきていますが、自分で調べた学生は時間がかかっているし、様々まとめる力というのはついていると思うのです。だから、そういう意味では、大学生は両方やるようにすればいいと思います。けれども、やはりその前段階では、手作業でやるという作業をきちんと入れていかないといけないと思います。少し話が替わるのですけれども、ある大学の建築学科の話ですが、今はわかりませんが数年前に聞いたときは、とにかく図面を書くことにCADを使わせず全部手作業でまずやらせる。それを体で覚えた上でCADを使うというのです。でも、別の大学は最初から全部CADを使っている。これはどちらがいいのかと思うのですけれども、その後、働く場所によって、現場に出ると、CADだけでは駄目な場面というのもあるらしいのです。そういう意味では、原始的な手作業は必ず入れる必要があるのではないかと思います。今は分かりませんけれども、やはりそれと同じように美術もそうですし、原型としての手作業の体験というのは必要だと思います。

最近の漫画家、作家なども、最初からコンピュータを使用していると話をよく聞きます。しかし、その人たちも、まだ小さいときには当然手作業を体験しています。もしかしたらこれからは最初から手作業がなくなってしまうのかというところは、何とも分からない未知の世界ですけれども、人間が生まれてきて、何千年も普通にやっていたことが、これが全部デジタル化というのは、多分それはまだ人間の脳は追いつかないのではないかと考えると、やはり原初的な体験というのは、特に小学校のうちには必要です。そのうえでいかにデジタルを取り入れるかは、段階を踏んでということなのではないかと思います。

以上です。

子ども総務課長　ありがとうございます。

では、粂原委員、よろしくお願いいたします。

粂 原 委 員　学生に、大学ではmanabaというシステムを使ってレポートを提出してもらうことも多いのですけれども、もうパソコンとかタブレットよりも、スマホの小さな画面に両手でどんどん入れていて、知識とか技術は定着しているのだと思うのです。でも、授業の内容を学生がどの程度理解しているかとか、どの程度自分事として受け止めているのかということを大事にしていきたいと思ったときに、やはりAIだけに頼ったレポートを提出してほしくはないと思うわけです。

ですので、やはり幼児期から、いかに生活体験や直接体験や人との関わりを積み重ねて大人になっていくことが大事かを改めて実感していますし、それがないAIの活用というのは、本当の学びになるのだろうかという疑問も持ったりします。だから、学生には、自分の経験とか自分の幼い頃の体験と、

理論をつなげながら考えてほしいと思うのです。

学ぶ楽しさみたいなところなのでしょうか。分かる楽しさとか、自分の考えが何か広がる喜びみたいなものをいかに積み重ねていくかというところなのかと思います。

子ども総務課長　ありがとうございます。

では、清水委員、よろしくお願いいたします。

清水委員　大学では、ゼミの前期、後期でレポートを２本出していただいていますけれども、レポートを出すときにも、今お話があったみたいに経験をまとめていくような、そういう課題にはしています。自分の考えや思いをきちんと書くことを指導しています。

子ども総務課長　ありがとうございます。

では、高橋委員、よろしくお願いいたします。

高橋委員　今は人生で一番勉強しているくらいで、AIで一から学び直している状況です。

教育長のご質問にお答えすると、まず分かりやすいのは、OECDが１月に公表した「Digital Education Outlook 2026」です。国際的な調査指標が数多く載っているので、その中から興味深いデータを探すのが一つの手だと思います。

国際的に見ると、例えばイギリスはAIに否定的な人が多い印象です。先日訪ねた際も、会う人ごとに「AIは要らないのでは」と言われました。教育新聞に似た論調です。ただ、そもそも学校にコンピュータがあまり入っておらず、コンピュータ利用自体への抵抗があるところへAIが来た、という事情もあります。裏を返せば、ここは日本にとってのチャンスかもしれない、とうれしくなって帰ってきました。いずれにせよ、こうした道具を使わないという選択は、時代的にほぼあり得ません。

いま予測されている方向として、OECDの報告でも、世界経済フォーラムでも、ほぼ同じ図が示されています。人は将来、「AIに代替される存在」になるか、「AIを使って自分を拡張する存在」になるかのいずれかだ、という見立てです。ですから、今日のAI利用が教師の代替的な利用なのか、教師を拡張する利用なのか、そこは常にチェックが必要だと思います。

二点目は「認知的オフローディング」です。成果と学びが釣り合わず、レポートは非常によくできているのに頭の中はすかすか、という状態を指します。これが大きな問題です。

三点目は「60点問題」です。AIは、合格すれすれの60点あたりに全員を引き上げてきます。他国の実験でも、初任・中堅・ベテランの教師で国語の点がどれだけ上がるかを見ると、初任者はAIの力で子どもの成績を伸ばせる一方、中堅・ベテランはあまり伸びない。できない人を一定水準まで引き上げるのは得意だが、60点から上に人間ならではの取組がある、ということです。若い先生こそAIを使って早くトラブルのない水準まで上がるとよい。例えば、保護者と会う前にAIと「壁打ち」して、どう伝えれば子どもも保護者

も納得するかを練る。ベテランが見れば「本当はこう言うべき」という点もありますが、初任者にとっては良い視点をもらえるだけでも十分価値があります。

これはAIに限りません。先日、音楽評論家に聞いたのですが、近ごろは高校生・大学生のアマチュアバンドの水準が上がりすぎていて、どの地方でもそこそこ演奏できる。YouTubeの影響で、お手本を見て一気にキャッチアップし、それを超える映像がまた次の水準を引き上げていくのだと。囲碁も同じで、人間がAIに抜かれた後、囲碁界全体の水準がむしろ上がった。AIが新たな定石を示し、それに触発されて人間が次々と新しい定石を生み出した。「AIが４割、人間が６割」という感覚だそうです。

こうしてうまく活用している分野があるわけです。同じ発想で、テスト学力の部分はお手本を見せて済ませ、その上で「本当に理解できているか」重さの概念、長さの概念、人の気持ちといった概念的理解を問うていく。だからこそ体験が大事で、議論が大事なのです。概念的理解は自分の中に構成されるものだから、AIには決して奪われない。そうした概念が重なり合うと、その子の個性がふくらんで人格になり、教育基本法第１条や学校教育法第51条が掲げる目標へと接続しやすくなるのだと思います。OECDもPISAを続けつつ、ティーチングコンパス、ラーニングコンパス、エージェンシーといった、方向性や概念の領域に軸足を広げて“保険”をかけています。ところが日本は学力調査＝見える学力にばかり集中しており、そこはAIに駆逐されかねない領域です。そこを今、心配しています。

とりわけ20代・30代はAIから逃げ切れません。彼らが初任期を一気に駆け上がり、その先の概念的な力を狙えるよう、プログラムを組み替えていかないとまずい、と感じました。

教　育　長　ありがとうございます。

子ども総務課長　はい。様々ご意見ありがとうございます。もし、まだ何かありましたらば、メールで事務局までお知らせいただければと思います。

それでは、次第の３番、その他に移ります。

今後のスケジュールについて、ご説明させていただこうと思います。最後に皆さんのお手元のほうにお配りしている、委員の皆様に書いていただくちよだリテラシー教育の評価と、あと今後の取組、それから裏面に九段中等教育学校のICT教育の評価、今後の取組のこちらのデータ版を、本日以降、事務局からお送りさせていただきます。

また、来週末には、本日の議事録を送らせていただいて、そちらをご確認いただきまして、恐縮でございますが、７月22日水曜日までにメールでご提出をお願いいたします。その後、教育委員会としての報告書を取りまとめまして、議会へ報告、また11月には区のホームページでの公表を考えております。議事録を含めましてホームページ上で公表することになりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、何かご不明な点等ございますでしょうか。よろしいでしょう

	か。 （な　し） それでは、以上をもちまして、今年度最後の第２回有識者会議を終了させていただきます。本日も貴重なご意見を賜り、ありがとうございました。
子ども総務課長	